



エコトピア

第18号



▲船上での水質調査

「びわ湖の日」30周年事業 びわ湖の「今まで」と「これから」を実施しました

この事業は、「びわ湖の日」の制定から30周年を迎えたことを契機とし、講演や事例発表により、地域における環境保全活動の今までを振り返り、今後の活動をみんなで考える機会とすることを目的に実施したものです。

7月30日午前9時、一般公募による60名の参加者が、快晴の彦根港に集合し、クルーズ船「megumi」号に乗船しました。開会にあたり、湖東環境・総合事務所の中嶋所長から「今日のイベントを契機として、今後、皆さん方には、是非ともびわ湖のサポーターに加わっていただきたい」と挨拶があり、午前中は、北湖を周遊しながら佐々木氏の講演や事例発表に聞き入りました。お昼は、多景島港に停船し、ピマスの刺身と煮付け、アメノイオの炊き込みご飯、エビ豆などの琵琶湖の幸がつまった湖魚食弁当に舌鼓をうち、午後には、弁当を提供いただいた松沢氏による話題提供を聞いた後、湖水の観察を行いました。

講演 「調べる“楽しみ”って何だろう? ～環境フォーラム湖東の取り組みから～」 滋賀県立大学 環境科学部 非常勤講師 佐々木和之さん

「つばめラボ」をなぜ環境フォーラム湖東でやったのかというと、数字で実感持てますか?ということなのです。ツバメが卵を生んでからふ化するまで、2週間ぐらいで、そこから巣立つまでに2週間ぐらいありますが、その間にいるいるなことが起こっているはずなのです。しかし、数字にしてしまうと、14日とか16日で終わる。それって本当に楽しいのかな?

従来のツバメ調査っていうと、何月何日、ツバメが帰ってきました。何月何日、卵がいくつ生まれました。何月何日、巣立ちました。情報としては重要ですよ。どういうふうにも、今年もどれぐらいの巣が作られていて、そこから何羽ぐらい巣立っているのか、学術調査とかそういう調査としては間違っていないのですけれど、面白いのかな。そして、新たな発見が、どれだけ取れるのかなというのがちょっと。

3年間やってきてどのようなことがあったかと言うと、小学生の方からは、「夜、ひなは外に尾を向けて寝ていることを発見」と報告がありました。ツバメの巣を見たことがある方、記憶ありますか。だいたい、くちばしを外に向けていませんか。夜、寝ているとき、どっちを向いているのかっていうことを、誰も気付いてない。だけど、子どもは思い込みじゃなくて、純粋に観察するから、見つけたのですよ。これはツバメの専門家に聞いたら、比較的新しい知見だそうですね。もちろん今となっては当たり前のことになっているのですが、古くから、このことが当たり前のように研究者の中で共有されていたかという意外とそうではない。それをちゃんと記録して、報告した。これは、素晴らしい発見だと思いますね。ひよっとしたら、こういう発表機会があれば、この小学生が第一発見者になっていたかもしれない。

それからですね、「ツバメが引っ越しした」という報告がありました。これは、生まれて13日目に、ひなはすべて今年新しく作った巣から、すぐ隣の去年からある巣に飛び移って引っ越ししたというものです。なぜやったのか、分かりません。分かりませんが、行った先がなぜか古い巣。こっちにいきなり引っ越ししただけだそうですね。なぜか全部、飛び移って、古い方で子育てを引き続いたそうですね。このことも、16日で巣立ちという数字で丸め込まれると分からないけれど、観察していたら分かった。

このことから言いたいことは、まだまだ身近なツバメといえども、発見があるし、それは図鑑に書いていないことがたくさんある。小学生が見つけたことが、専門家の中で比較的最近になって共有された知見だったりすることがあるってことですね。こういうことが楽しいのではないかなということですね。

今日、お話ししたかったのは、「数えて終わっていませんか?」、「名付けて終わっていませんか?」、「そうすることによって、つまらなくしているではありませんか?」というのが皆さんへの問いかけです。数字が分かることは重要です。名前も分からないより、分かった方がいいです。だけど、重要なのはその先なのです。それらが分かった後、どれだけ相手を見ているのか。

「何であのズメはあそこでえさをつっついてるのだろう?」ということをして、「えさを取っている」と言った瞬間に、それは行動で記述したことになるので、情報が全部飛びます。「何をしているのか?」ということがどれだけしっかり記述できているか、これが観察のヒントです。

皆さん、言葉で丸めないでください。「ツバメ」という言葉で片付ける、「えさを食べている」という言葉で片付ける、「水浴びをしている」という言葉だけで片付けてしまわずに、なぜあなたはそう思ったのかって書いておくことが、実は非常に重要です。ひよっとしたら、動きだけ書いていたら、全然違う発見があるかもしれません。このことが、今日、皆さまにお伝えしたかったことです。

事例発表① 「粉せっけん運動の取り組みから」 愛のまちエコライフ 理事 堤 昭子さん

私自身のせっけん運動との関わりは、昭和48年ぐらいに琵琶湖で赤潮が発生したことを契機として、それまで農業改良普及所の指導で野菜づくりを勉強してきた生活改善グループが、せっけん使用推進運動で愛東町内を巡回したことが始まりです。

滋賀県で生まれ育った私にとって、琵琶湖は「ふるさと」そのものです。ふるさとを守るため、せっけん推進アドバイザーの講習を受け、仲間と一緒に町内のいろいろな場所に出向き、せっけんによる洗濯機の使い方や蛍光剤について話しをしたり、幼稚園や小学校へは紙芝居を作って出前授業に行きました。

私たちのせっけん運動というのは、続けているってということが第一のことだと思っています。取り組みを始めてから、今、30年が経ちますが、この間、一生懸命、真っ正直に愛東はやってきました。この取り組みをこれからどうするかと問われれば、やはり「いいことは続ける。」と答えるでしょう。やっぱり、何事でも続けなかったら、子や孫の世代につなげませんし、次代を担ってくれる子どもが安心して暮らせる世の中にしたい、これを強く思います。

一度壊した自然を元に戻すことは、とても大変なことだということ、母なるびわ湖は、1,400万人の飲料水でもあることをしっかりと心に刻み、皆さんとともに今後とも活動していきたいと思えます。

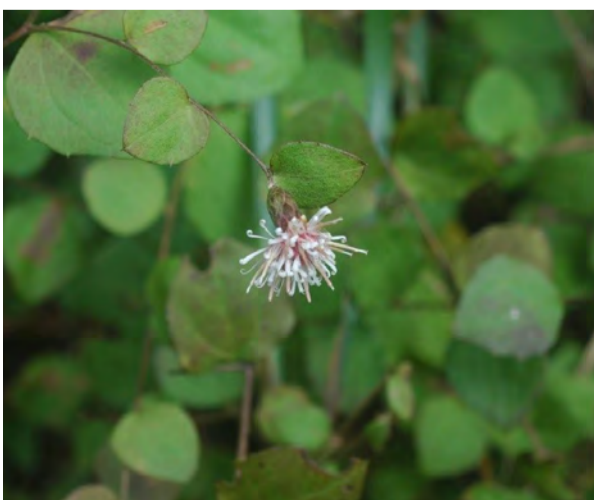
事例発表② 「水の源となる山の保全活動」 伊吹山もりびとの会 事務局 長東憲一さん

日本百名山に入っている伊吹山の魅力は、苔や藻を含めると山全体で1,600種類もの多くがあるとされている植物の多様性です。伊吹山に多様な植物が見られるのは、地形的に常に湿った風の通り道となっていることから、夏にはガスが発生し、冬には大量の積雪があることに加え、石灰岩が多くアルカリを好む植物もいること、戦国時代に織田信長が薬草園を開かせたと伝えられる歴史的な側面に由来すると思われることなどが理由です。

もりびとの会では、活動の中で山頂ボランティアガイド、お花畑の案内を行っております。この活動では、来られる方に、単に花の名前を知ってもらうだけでなく、花の観察を通して、それが本来持っている意味を知ってもらうように案内しています。例えば、シソ科の茎が、折れにくいように丸でなく四角になっていること、葉の形や付き方にしても、その場にふさわしい光合成を考えたものになっていることなどです。こういったことを、よく理解していただき、我々人間と植物との共存について、考えて欲しいとの思いがあります。

現在、伊吹山には、年間35万人ぐらいの人が訪れますが、入山者の増加に伴い、靴などに種子が付いてきて、セイヨウタンポポ、フランスギクなどの外来植物が入り込んでいます。この対策は、早く見つけて早く処理すること、これに尽きると思っています。一端、繁殖し出したら、びわ湖のブラックバスと同じで、たいへんなエネルギーがいります。残念ながら、伊吹山の場合、外来種については、かなり手遅れな状態で我々は非常に危惧をしています。予算不足、人材不足のうえに、保全方針にまだはつきり決まっていない部分もある中で、残念とばかり言っても仕方がないので、我々は外来種を人海戦術で駆除している、これが現状です。

湖東の生き物の仲間



コウヤボウキ(キク科)

花期は9月半ばから11月初めにかけて。落葉小低木、山地や丘陵地のやや乾燥した所に生える。30～80cmの小低木で枝は細く灰褐色で多く枝分かれする。花の少なくなった時期山裾でピンク色の花を見つけるとなぜかホッとします。和名はこの枝を束ねて、高野山の僧侶がホウキにして庭を掃いたところから。



ニンギョウダケ(サルノコシカケ科)

秋の松林に折り重なって発生する。傘は5～15cmでへら形、扇形で成長するにつれ、押し合ってゆがむ。傘表面は白色～クリーム色で柄はやや太く傘の中心をはずれたり横についたりする。大きなものは直径30cmになりキノコ類の中でも食する量が多い。ゆでて酢の合えものにするのが最良。

事例発表③

「麒麟ビール滋賀工場 環境への取り組み」

麒麟ビール(株)滋賀工場 副工場長 畝 博之さん

工場を運営している立場では、エネルギー事情というのが大きな関心事です。工場として、できるだけエネルギーを使わずにビールをつくるという取り組みをずっと続けています。現在、ビールを1KLつくるのに、どのくらいエネルギーを使うのかということ、ここ何十年間指標をとっていますが、私が会社に入ったときに比べて、大凡半分ぐらいでビールをつくれるようになってきました。これは生ビールを供給している国では、世界最先端と言われており、日本のビール会社は、みな非常に高度な技術を持っていると言われております。

もう一つの関心事である温暖化対策、炭酸ガス削減についてですが、弊社では、燃料を油からガスに切り替えるなどの設備投資を行い、40%以上削減しました。これらの取り組みに関して、先日、第2回滋賀低炭素リーダー賞をいただきました。

また、容器の面でも、省エネルギー、省資源の活動をずっと続けております。缶の形は、昔とはずいぶん変わってきていて、今使っているものは、蓋の部分、飲み口が小さくなっています。これによって、アルミの使用量を26%減らしています。それから、壘ですが、外観上は、分かりにくいのですが、弊社の壘は肉厚が薄くなっており、以前よりはトラックの配送台数を1割削減できました。

さらに、従業員の取り組みとしては、水源を守る活動として、全国の工場、営業拠点の従業員が家族を含めて山に行き木を植えています。滋賀工場では、多賀町の大滝山林組合さんと滋賀県では第1号となる「森林パートナー協定」を結ばせていただきました。夏休みのエコ・ブルワリーツアーでは、多くの子どもさんに来ていただき、工場見学の他、山林組合さんによる環境教育などを行い、毎回、好評をいただいております。

話題提供

「びわ湖と共に50年 ～漁師の眼～」

びわ湖の水と地域の環境を守る会 代表 松沢松治さん

昭和50年台に琵琶湖総合開発が始まり、堤防の建設などにより、いろいろなところで、ヨシが壊されました。その後、湖岸のヨシの大切さが分かり、ヨシを再生するため、ヨシがなくなったところにヨシを植えてみると、簡単に口で言うようにいかず、植えてみたら、全然、ヨシは生えてこない。琵琶湖は、年によっては水位の上下が激しいのが特徴で、台風でひとたび大雨が降ると、一晩で70cm増えることもあります。そうしたときに、風が吹いて波が来たら、ひとたまりもなく、植えていたヨシは全部水にさらわれていきます。今までの経験から冬の間はこの辺までは波が来るだろうけど、ここまでは来ないだろうという場所へ植えるのですが、想定外のことが起こって、すべて波で持っていかれる。そのようなことの繰り返しで、ヨシを植えるのには、難しいことがたくさんあります。

6、7年前から、毎年続けてヨシ植えをやっていますが、やっと3分の1ぐらいは居つたかなという感じで、まだまだ、これからなのです。一旦、壊したものは、人間の手ですぐさま直せるとしたら、自然はそうはいきません。家の壁やガラスなら割れてもすぐに直すことができますが、自然だけは絶対に直りません。自然は、そんなに容易いものではなく、すごく緻密なもので、人間がとても計り知れないくらい計算がし尽くされたものが自然ではないかなと、そのようなことを思っています。

琵琶湖の周囲には水門が多くありますが、昔のものは、今の水門のように上から下へ閉めていくものとは違い、1枚ずつ木を落とし込み積んでいくことで、下から上へ閉めていくものでした。この昔の水門ならば、大雨の時、下の板を2、3枚残しておくことで、増水した水は上の方を流れて、泥やごみは下の板で止まり、琵琶湖へは流れ出ません。先人たちは、このようなこと一つを取り上げて、自然と向き合い、いろいろと細かなところまで考え、取り組んでこられたのだな、今、このようなことを感じています。

現在、県では、マザーレイク21計画を見直しするなど、琵琶湖の再生に取り組んでいますが、自然を再生するという事は難しい、この一言に尽きると思います。まず、元の自然に戻ることは、あり得ません。元の自然に似せることはできますが、それはどこかに歪みが出てきます。人間が作った自然には、必ずと言って良いほど、歪みが生じます。

今すぐに、みんなが出来ることは、これ以上、自然を壊さないこと。やっぱり人間は、自然を壊しながら生きてダメで、共に生きていかねばならない。一度、壊れた自然は、人間の力では元に戻らず、自然を取り戻すというのは、自然に任せなければ仕方がない。私自身、35年ほど環境問題に携わり、今、このようなことを強く思っています。



▼湖魚食弁当



▲船上での振り返り

環境フォーラム湖東からのお知らせ

環境問題に関心・興味のある方、取り組んでいる方、ゆっくりお茶でも飲みながら、語り合いませんか？ 思わぬ発見、出会いがあって、まさに「棚からぼたもち！」のひとときです！



「川の景観づくりを追い求めて～私の原点」
水色舎/滋賀県立大学環境科学部 非常勤講師
佐々木和之 氏

平成23年11月29日(火) 19:00～

場 所: SLOW 彦根市小泉町 34-11 0749-23-4600
地 図: <http://www.slow-db.com/common/lib/map/> (裏面地図掲載)
参加費: 500円

申込・問合せ先 環境フォーラム湖東 事務局
〒522-0071 滋賀県彦根市元町 4-1 湖東環境・総合事務所環境課内
TEL0749-27-2255 FAX0749-27-1688
E-mail info@f-koto.org

環境フォーラム湖東団体会員
湖東地域農業センター
彦根市環境保全指導連絡会議
エコグループ・アイ
製のまちエコライフ
愛荘町さわやかまちづくり推進会議
環境学び舎のたね
グラウンドワーク甲良
宇治川水系を見守る会
株式会社平和堂
ひこね自転車生活をすすめる会
リサイクルステーション
豊原工業株式会社
NPO 環境会 (太陽光発電の会)
彦根市 P T A 連絡協議会 おやじの会
滋賀県自然環境保全・学習ネットワーク湖東フィールドグループ

高宮の自然環境とほたるを守る会
彦根市 P T A 連絡協議会
彦根市 環境・緑山・森林会
豊郷町消費学習グループ
大上川を豊かにする会
快速環境づくりをすすめる会
NPO 芹川
芹川自然観察の会
彦根自然観察の会
(社) 滋賀県環境保全協会
(社) 彦根青年会議所
太田川「夢の会」
株式会社キントー
ガラス工房エヴァグリーン
湖東フィールドグループ



湖東地域環境シンポジウム講演
「滋賀県の外来植物」



10:30 開会式・よし笛ミニコンサート
出演 寺村 尊子氏

11:00 講演
講師 村長 昭義氏
(滋賀県外来生物問題検討委員会)

13:30～15:00 エコグッズづくり体験
於 ビバシティ彦根 2階研修室
<参加費無料>

同時開催 湖東の環境活動パネル展

お問い合わせ先:
環境フォーラム湖東事務局
(湖東環境・総合事務所環境課)
TEL0749-27-2255 E-Mail info@f-koto.org

受付 ビバシティ彦根 1階センターモール

主催: 環境フォーラム湖東
共催: 湖東定住自立圏環境・ごみ処理部会 (彦根市、愛荘町、豊郷町、甲良町、多賀町)
滋賀県湖東環境・総合事務所

発行: 環境フォーラム湖東 (平成23年10月)
〒522-0071
彦根市元町4-1 湖東環境・総合事務所環境課内
TEL 0749-27-2255 FAX 0749-27-1688
URL <http://www.f-koto.org/>
E-Mail info@f-koto.org

環境フォーラム湖東では新規会員を募集しています

すでに環境に関する活動をされている方や、ちょっと環境の勉強をしてみたいという方、企業・市民団体のみならず、どなたでも参加していただけます。まずはお気軽に、左記事務局までご連絡ください。環境フォーラム湖東に関する詳しい情報をご連絡いたします。